

研究紀要

第13号

1997

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

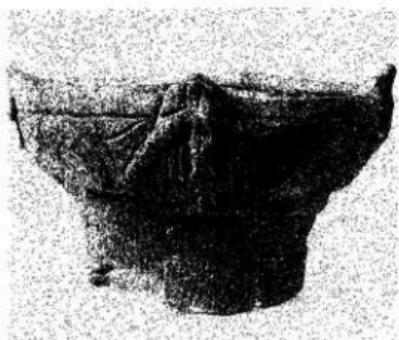
研 究 紀 要

第 13 号

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真 1



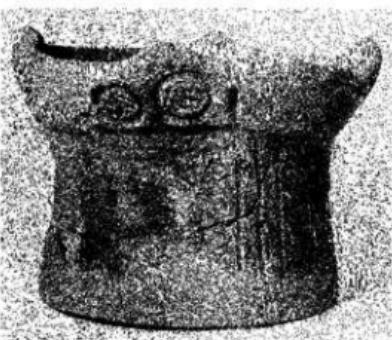
1 包含層



2 包含層



3 10号住居跡



4 9号住居跡



5 15号住居跡



6 包含層

写真 2



7 10号住居跡



8 10号住居跡



9 10号住居跡



10 包含層



11 3号住居跡



12 10B号住居跡

目 次

序

[論文]

- 川越市鶴ヶ丘遺跡C区の石器群 田中 英司 (1)
- 水窪遺跡の研究 谷井 彪 (13)
—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性— 細田 勝
- 埼玉県内における柄鏡形住居跡の地域的様相 (1) 鈴木 秀雄 (67)
- 手焙形土器の研究 (2) 高橋 一夫 (85)
—伊勢湾・近江・北陸編—
- 馬鐸と馬鐸装馬形埴輪 中村 倉司 (141)
- 関東地方出土の古代權衡資料 福田 聖 (169)

埼玉県内における柄鏡形住居の地域的様相（その1）

鈴木秀雄

要約 縄文時代中期終末期に出現した柄鏡形住居は、その特異な形態、構造などから、これまで多くの議論が交わされてきた。近年では、その地域性や住居形態の消長に関する問題が重要な研究テーマとなっている。本編では県内の調査事例、特に大宮台地とその周辺地域について、その出現期から、盛行期、そして後期の張出部が変化する段階までの変遷過程をあとづけることで、柄鏡形住居の地域的あり方についてその一端を提示した。

1 はじめに

近年、柄鏡形住居に関して、論文集が編まれたり（帝京大学山梨文化財研究所 1995）、パネルディスカッションが開かれ、資料集（かながわ考古学財団 1996）が出されるなど、柄鏡形住居に関する研究が盛んである。

筆者も、入間市坂東山遺跡（鈴木 1996）の調査で柄鏡形住居を調査して以来、興味をもつていたところで、県内の調査事例について調べ始めた。県内では、ここ十年来調査事例が増えており、良好な資料が蓄積されてきている。筆者の仕事はまだ中途半端で、さしたる成果も上がっていないが、次の段階へのステップとしてここに本編を掲載させていただくこととなった。とくにその作成にあたって、本書の編集者である村田健二氏には、多大なご尽力を賜った、銘記して感謝するしたいである。

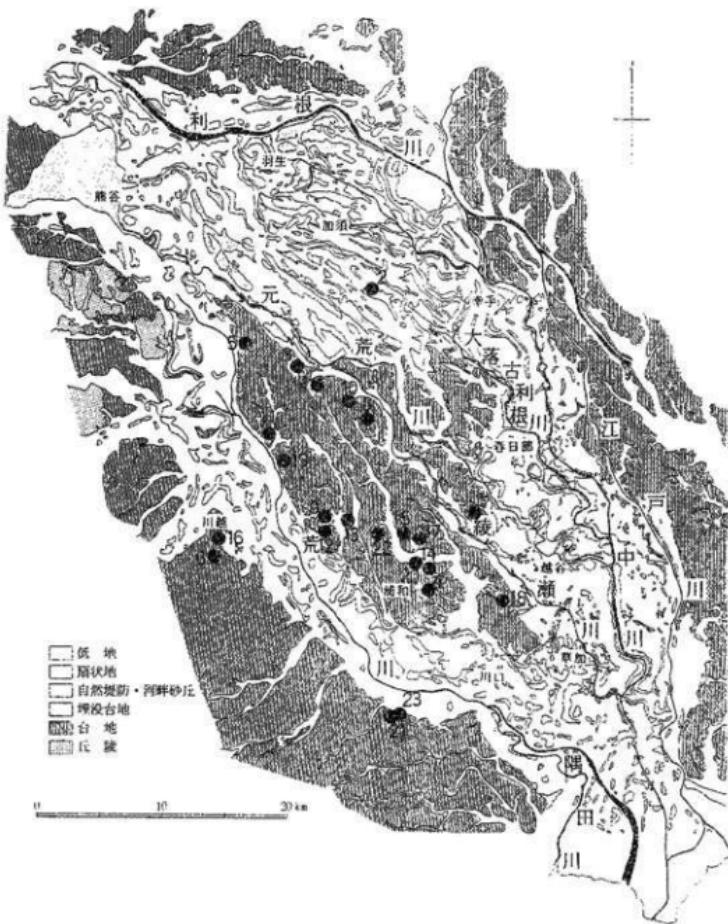
2 大宮台地とその周辺地域にみる柄鏡形住居の調査事例

本県の北西部地域の丘陵や山地帯には、縄文時代中期から後期初頭期にかけての敷石住居が分布し、昭和40年代に入って調査が行われるようになった。これとは別に大宮台地やその周辺地域では、敷石をともなわない柄鏡形住居が分布しており、対称的な様相を見せている。近年では調査事例も増えており、以下ではその調査事例を個別にみていくたい。

なお、時期区分については、谷井・細田の中・後期土器編年（谷井・細田 1995）に準拠した。したがって加曾利E IV式期は設定しない。称名寺式は、一般化している古・中・新の3段階区分を用いた。また、図示した住居の実測図の縮尺は、1/120に統一したが、土器は任意の縮尺である。

(1) 北本市提灯木山遺跡1号住居跡（第2図1）

加曾利E III（新）式期。門形主体部の東側に、梢円形の柄部が開いて連結する。主体部規模は5.0m×5.1m、柄部規模は2.2×2.2m、主軸長は7.2mである。炉は地床炉で、主体部中央からやや奥壁寄りに位置する。柱穴は、主軸上の奥壁部に1本と、左右に各2本を配置した5本柱構造が想定される。さらにその外側に壁溝を伴った柱穴が10本余りめぐり、壁溝の一端は対ビットにつながつ



- 1 提灯木山遺跡 2 修理山遺跡 3 明花東遺跡 4 上手遺跡 5 赤第遺跡 6 東台遺跡 7 黒谷田端遺跡 8 宿前田遺跡 9 西大宮バイパスNo.5 遺跡 10 志久遠跡 11 指扇下戸遺跡 12 下加遺跡 13 八幡耕地遺跡 14 会ノ谷遺跡 15 大宮市A-69遺跡 16 鎌倉公演遺跡 17 関沢遺跡 18 吠原遺跡 19 東谷遺跡 20 北宿遺跡 21 義名山遺跡 22 神明遺跡 23 柿ノ木坂遺跡

第1図 遺跡位置図 (括弧内: 1985作成の地層現況図を使用)

ている。対ビットは、柄との連接部より内側にあり、ビットを連ねたような長楕円形である。埋甕は、主軸上の対ビット間に柄部中央にあり、対ビット間のものは胸下半を欠く深鉢、柄部のものは口縁部から上半を欠く深鉢である。柄部の掘り込みは、主体部より一段浅くなっている。

(2) 北本市提灯木山遺跡 3号住居跡（第2図2）

加曾利E III（新）式期。規模は $3.7 \times 4.0\text{m}$ 、南北方向にやや長い円形の住居であるが、北西側で2号住と重複しており、この部分に柄部がついていた可能性が高い。3号住の北西部には埋甕と対ビットがあり、埋甕と炉をむすぶ主軸の延長上に、2号住の炉の直ぐ北側に設けられた埋甕がある。この埋甕を3号住柄部の埋甕と想定することができる。1号住のように柄部の掘り込みが浅ければ、調査時の検出は難しいものと思われる。住居中央の炉は、炉体土器をもち、炉の周りには6本の柱穴が規則的に配置される。壁柱穴や壁溝はない。炉体土器は深鉢と両耳壺の口縁部破片、埋甕は口縁部を欠いた両耳甕が使われている。

(3) 駒西町修理山遺跡第11号住居跡（第2図3）

加曾利E III（新）式期。住居の向側が搅乱されているが、主体部は円形で、南西側に短い柄部をもつものと推定される。主軸長は、 5.15m である。炉は上体部中央に位置し、炉体土器が深鉢と両耳壺合わせて4個体出土している。かから柄部先端まで浅く土壤状に掘り込まれ、掘り込みに沿って溝で結ばれた対ビットが検出されている。炉に近い対ビット間に埋甕があり、深鉢のほぼ完形個体が使われている。壁直下に壁溝がめぐり、柱穴は壁寄りに一部見つかっているだけで、全体的な配置は分からぬ。

(4) 浦和市明花東遺跡第1号住居跡（第2図4）

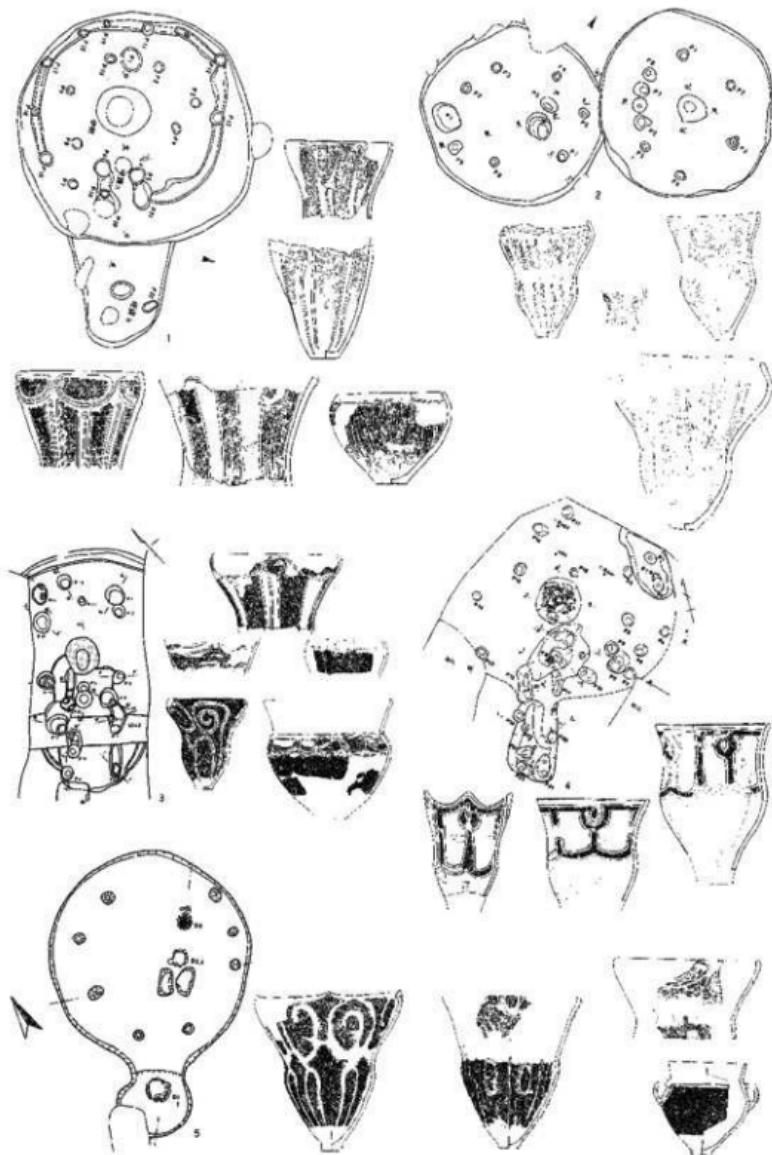
称名寺（古）式期。主体部の壁は検出されず、柄部と炉、柱穴等が見つかっている。主体部規模は推定で $4.5 \times 5.0\text{m}$ 、柄部規模は $1.8 \times 1.05\text{m}$ である。壁柱穴が間隔は不均等ながらほぼ円形にめぐり、またその内側にも炉を囲むような配置で柱穴がある。炉は主体部中央に位置し、石囲い炉で炉体土器をともなっており、深鉢が3個体出土した。連結部の対ビットは楕円形で、対ビットにかかる不整形の落ち込み内から埋甕が出土している。底部から胸下半を残す深鉢である。柄部は、連結部から先端に向けて緩く傾斜した掘り込みをもち、6本の柱穴がある。

(5) 北本市上手遺跡J 1号住居跡（第2図5）

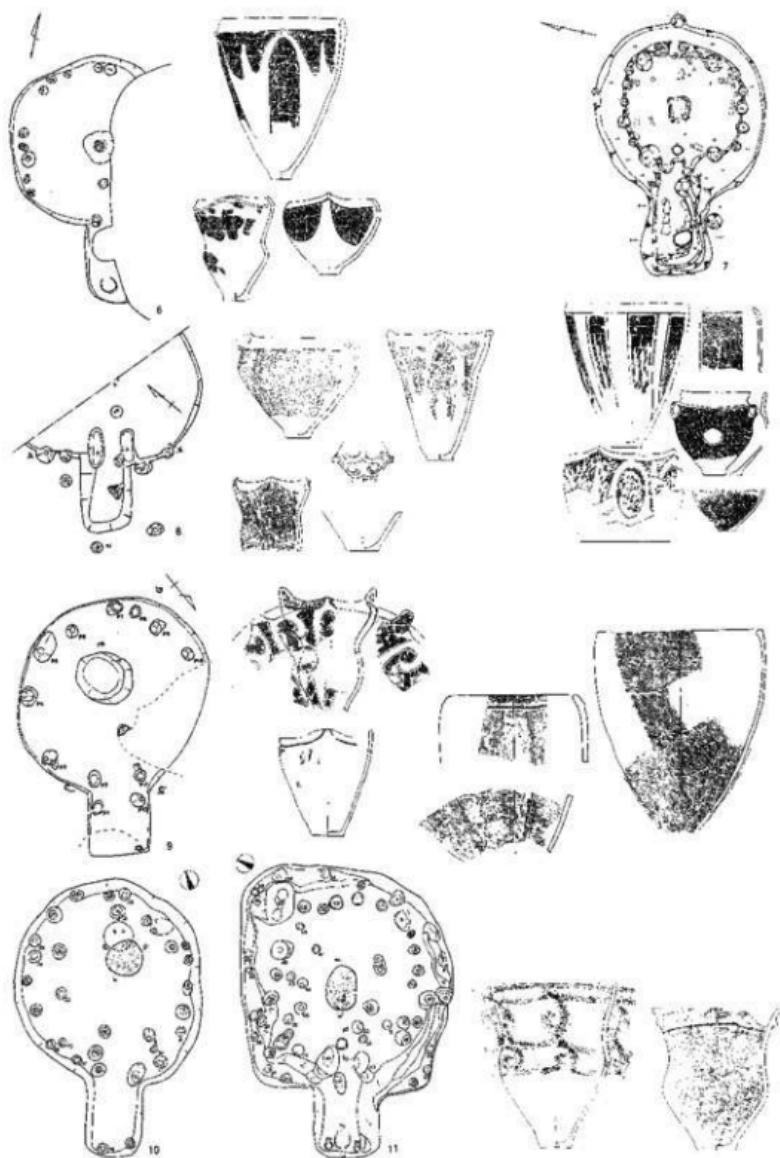
称名寺（古）式期。円形主体部の南側に円形の柄部が連結する。主体部規模は $4.5 \times 4.4\text{m}$ 、柄部規模は $1.6 \times 1.6\text{m}$ 、主軸長は 5.9m である。炉、埋甕、対ビット、柄部を結ぶ主軸線からみると主体部は北西側に偏っている。炉は炉体土器をともない、主体部の東側に偏って位置する。炉の南側に埋甕が埋設されており、さらに埋甕に近接して方形の対ビットがある。埋甕は、深鉢の底部と、両耳壺の完形個体である。柱穴は壁柱穴で、8本検出されている。柄部は土壤状に掘り深められており、埋甕が2個体入れ子状に埋設されている。1個体は深鉢のほぼ完形個体であり、もう1個体は口縁部から胸上半の大部分を欠損する。形態・構造的に、不規則な住居である。

(6) 鴻巣市赤台遺跡J 4号住居跡（第3図6）

称名寺（古）式期。主体部は、北側の奥壁がやや張り出し、西壁が直線的につくられていることから、隅丸の五角形に近い平面形のものと思われるが、東半分を壊されている。南側に楕円形の柄



第2図 柄鏡形住居跡諸例（1）



第3図 柄鏡形住居跡諸例 (2)

部を連結する。主体部規模は径3.5m、柄部径は1.8m、主軸長は5.3mである。炉は地床炉で、主体部の中央に位置し、炉の南側にある埋甕は、深鉢の完形個体である。柱穴は壁柱穴で10本みつかっているが、その規模・配置は不規則である。連結部には対ビットになると思われるビットが1本ある。柄部の掘り込みは浅く、主体部に向けて緩く傾斜し、先端に埋甕がある。埋甕は、深鉢のなかに壺形土器が入れ子状に埋設されており、いずれも完形個体である。

(7) 大井町東台遺跡11地点第20号住居跡（第3図7）

称名寺（古）式期。円形の主体部の西側に、方形の柄部が連結する。主体部規模は4.0×3.9m、柄部規模は1.8×1.5m、主軸長は5.8mである。奥から約50~70cm内側が、さらに15~20cmの深さで円形に掘り込まれ、掘り込みに沿って対ビットと16本の柱穴がめぐる。四隅に配された規模の大きな4本が主柱穴で、さらに主軸上の奥壁に接して内傾した柱穴が1本ある。炉は主体部中央に位置し、石皿・凹石そして深鉢の土器片で埋ってある。対ビットに近接した位置と、柄部先端に埋甕があり、胴部を穿孔した両耳壺の完形個体と、深鉢のほぼ完形個体が出土している。柄部は主体部床面より約18cm浅く、先端と南壁直下に壁溝をともなう。敷石が、奥壁柱穴列の内側の直線的な配列や、柄部などに部分的に認められる。

(8) 岩槻市黒谷田端前遺跡第5号住居跡（第3図8）

称名寺（古）式期。遺構の北半分は未調査であるが、円形の主体部の南西側に、方形の柄部が連結するものと推定される。主体部規模は推定4.5m前後、柄部規模は1.7×1.5m、主軸長は6.0m程度と思われる。連結部の対ビットは長梢円形で、対ビットから約20cm内側に埋甕がある。埋甕は把手を欠損するものの、両耳壺のほぼ完形個体である。柱穴は壁柱穴で、対ビットと並ぶように4本が壁に接して見つかっている。柄部は連結部から先端に向けて緩く傾斜して低くなる。

(9) 上尾市宿前III遺跡第2号住居跡（第3図9）

称名寺（古）式期。主体部はやや不整な円形で、北東側に方形の柄部が連結する。掘り方は約14cmと全体的に浅く、部分的に搅乱されている。主体部規模は推定4.0×4.0m、柄部規模は推定1.4×1.4m、主軸長は推定5.5m程度であろう。炉は地床炉で、主体部中央からやや奥壁寄りに位置し、同期の土壤と重複する。柱穴は壁柱穴で、主軸上の奥壁に1本と、左右対称的に4本づつ配置されたものと考える。連結部には二対の対ビットが見つかっており、対ビットと炉の中間に埋甕がある。埋甕には2個体の土器を使用し、深鉢の胴上半を欠損したものを、大型土器片が取り用ひように埋設している。

(10) 大宮市西大宮バイパスNo.5遺跡第2号住居跡（第3図10）

称名寺（古）式期。主体部はやや縦長の円形で、南東側に長方形の柄部を連結する。主体部規模は4.4×4.0m、柄部規模は1.5×1.2m、主軸長は5.9mである。炉は地床炉で、奥壁寄りに位置する。柱穴は壁柱穴で、27本見つかっているが、このうち奥壁の1本と、左右に2本づつ配された計5本が主柱穴である。連結部に対ビットが、また柄部先端にも2本の柱穴がある。埋甕はない。

(11) 大宮市西大宮バイパスNo.5遺跡第1号住居跡（第3図11）

称名寺（古）式期。主体部は方形基調であるが、東コーナーが丸くなる。加えて東コーナーを除く壁直下にテラス状の高まりがあり、東台遺跡第20号住と類似した構造をもつ。主体部の南西側に、

方形の柄部を連結する。主体部規模は $4.7 \times 4.6m$ 、柄部規模は $1.5 \times 1.4m$ 、主軸長は $6.2m$ である。炉は地床炉で、主体部中央に位置する。柱穴は、壁直下や、テラス状の高まりの内側にめぐる。このうち、主軸上にある奥壁の1本と、左右四隅に配された4本の計5本を主柱穴とする。連結部の対ビットは2本のビットを連ねたような「八」の字状の形態で、また柄部先端にも二対の柱穴が見つかっている。対ビット間と、柄部先端に埋甕があり、いづれも深鉢のほぼ完形個体である。

(12) 伊奈町志久遺跡第8号住居跡（第4図12）

称名寺（古）式期。円形の主体部の西側に、方形の柄部が連結する。柄部は先端に向けて緩く傾斜する。主体部規模は $5.2 \times 5.4m$ 、柄部規模は $1.7 \times 1.7m$ 、主軸長は $6.9m$ である。炉は主体部中央に位置し、地床炉である。柱穴は、壁のやや内側をめぐっており、奥壁部のものは壁溝をともなう。このうち主柱穴は、主軸上にある奥壁近くの1本と、左右四隅に配された4本を合わせた計5本である。対ビットは、小型円形と大型の不整方形のものが、二対並んでおり、柄部先端にも二対の柱穴がある。埋甕は、対ビット間と、柄部先端にあり、口縁を欠く深鉢である。

(13) 大宮市指扇下戸遺跡第2号住居跡（第4図13）

称名寺（古）式期。主体部はやや縦長の円形で、南側に長方形の柄部が連結する。主体部規模は $5.0 \times 4.8m$ 、柄部規模は $1.6 \times 1.2m$ 、主軸長は $6.6m$ である。大小多数のビットが竪穴の内外に見つかっているが、深いビットが15本余り、炉を中心に半径 $1.5m$ 前後の範囲を、部分的に溝をともなって円形にめぐっており、これらを基本的な柱穴と考えたい。炉は地床炉で、主体部のほぼ中央に位置する。連結部の対ビットは溝でつながり、対ビットに接して埋設された埋甕は、大型の浅鉢の中に、底部を欠いた深鉢が入れ子状となっている。柄部中央にある埋甕は浅鉢の完形個体で、埋甕の周りには柱穴がめぐる。

(14) 大宮市下加遺跡第40号住居跡（第4図14）

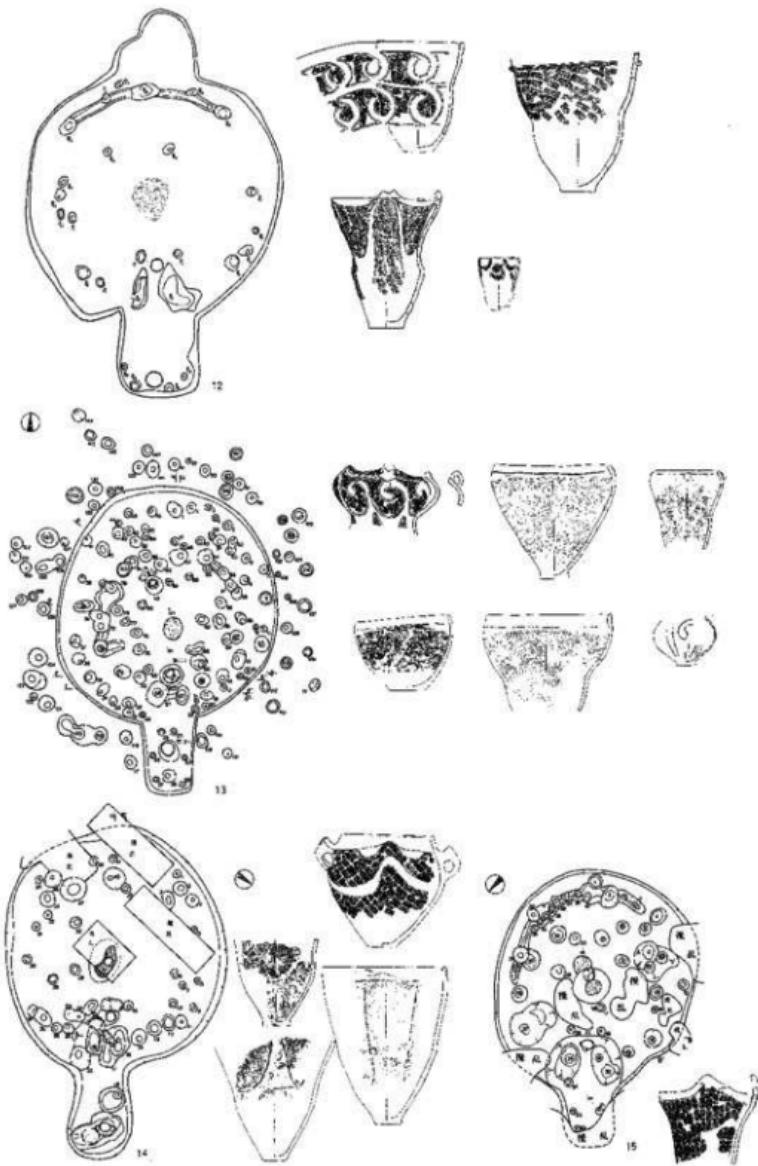
称名寺（古）式期。主体部は縦長の楕円形で、北東側に楕円形の柄部が連結する。主体部規模は $5.2 \times 4.8m$ 、柄部規模は $1.8 \times 1.4m$ 、主軸長は $7.0m$ である。炉は地床炉で、主体部中央に位置する。柱穴は壁柱穴であるが、主体部の四隅に深い柱穴が4本あり、これを主柱穴と想定できる。対ビットは、掘り直したように楕円形のビットが重なり合っており、埋甕も、対ビット間と、柄部先端に2基づつある。埋甕は両耳盃と、口縁部あるいは底部を欠いた深鉢である。

(15) 大宮市下加遺跡第58号住居跡（第4図15）

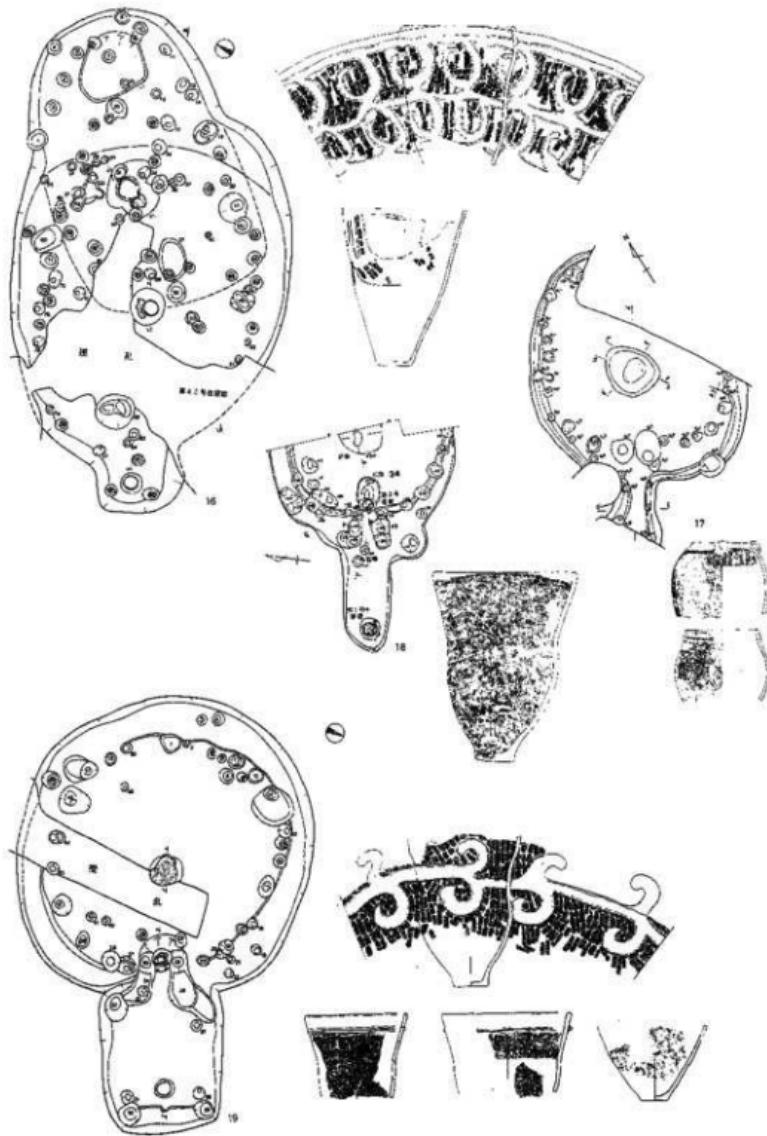
称名寺（古）式期。主体部は縦長の楕円形で、北西側に連結する柄部は、先端部が壊されている。主体部規模は $4.8 \times 4.2m$ 、柄部規模は推定 $1.1 \times 1.1m$ 、主軸長は推定 $5.9m$ である。炉は地床炉で、主体部中央に位置する。柱穴は、壁柱穴が壁から $30cm$ 前後内側をめぐり、一部壁溝をともなう。このうち主柱穴は、主軸上の奥壁に1本と、左右に各2本配された5本の柱穴である。楕円形の対ビットは深く、対ビットの周囲から柄部は、浅く掘り込まれている。対ビット間に埋甕は、胴下半を欠いた深鉢である。

(16) 大宮市下加遺跡第45号住居跡（第5図16）

二軒の住居が重複しており、第45号住は東側の壁が検出できず、また南側を中心に大きな搅乱がある。時期は称名寺（古）式期。主体部は縦長の楕円形で、南西側に短い柄部が連結する。主体部



第4図 柄鏡形住居跡諸例（3）



第524 柄鏡形住居跡諸例 (4)

規模は推定 6.5×5.9 m、柄部規模は 1.3×1.9 m、主軸長は推定7.8mと大型である。炉は主体部中央に位置し、底部を欠損した深鉢を炉体土器にもつ。壁柱穴が壁から30~50cm内側を密接してめぐるが、主柱穴は不明である。連接部の対ピットは見つかっておらず、柄部先端に一対の細い柱穴と、埋甕が埋設されている。埋甕は口縁部を欠いた深鉢である。

(1) 桶川市八幡耕地遺跡 8号住居跡（第5図17）

称名寺（古）式期。他の遺構と重複していて分かりにくいが、やや縦長の円形主体部の南西側に横円形の柄部が連結するものと思われる。主体部規模は推定 5.0×4.5 m、柄部規模は推定 1.8×1.6 m、主軸長は推定5.8mである。炉は、主体部中央に位置し、1個体分の深鉢の破片を使った土器囲いがある。柱穴は壁柱穴で、壁溝に一部かかるように密接してめぐるが、前面部では対ピットと並んで直線的な配置である。壁溝は柄部にもつながっているようで、細い柱穴をともなう。連結部の対ピットは、円形で柱穴より規模が大きくなる。埋甕は見つかっていない。

(1) 浦和市会ノ谷遺跡第34号住居跡（第5図18）

称名寺（古）式期。住居の西側半分が調査されており、円形主体部の西側に長楕円形の柄部が連結する。主体部規模は 4.0 m前後、柄部規模は 2.3×1.1 m、主軸長は6m程度であろうと推定される。炉は地床炉で、主体部のほぼ中央に位置するものと思われる。柱穴は壁柱穴で、壁から40~20cm内側におよそ等間隔で円形に配置され、溝で連結する。溝は連結部の対ピットにつながっている。対ピットは、ピットを連ねたような長楕円形である。また連結部の南側はピットをともなってコブ状にふくらむ。埋甕は対ピット間と柄部先端にあり、いずれも深鉢の完形個体である。

(1) 大宮市下加遺跡第53号住居跡（第5図19）

称名寺（中）式期。円形主体部の北東側に長方形の柄部を連結する。主体部規模は 6.4×6.3 m、柄部規模は 2.9×2.6 m、主軸長は9.3mである。竪穴の掘り込みも深く、大型の住居跡である。炉は、主体部中央からやや柄部寄りに位置し、地床炉である。柱穴は、壁から50~70cm内側にめぐり、このうち規模の大きな柱穴は、主軸上の奥壁部に1本、左右に8~9本がほぼ等間隔で配置されている。連結部の対ピットは、「八」の字状に開いて柄部につながる。柄部先端は緩い段差があり、二対の柱穴をもつ。埋甕は2基あり、連結部の対ピット間では胴上半部を欠いた深鉢が、柄部先端では口縁部を欠いた深鉢が見つかっている。

(1) 大宮市A-69号遺跡第1号住居跡（第6図20）

称名寺（中）式期。擾乱が周間に大きく入り、主体部南側の壁や、柄部の一部が壊されている。また、北東側は第7号住と重複する。円形主体部の南側に長方形の柄部が連結する。主体部規模は推定 5.3×5.3 m、柄部規模は 2.0×1.2 m、主軸長は7.3mである。炉は、主体部中央に位置し、地床炉と思われるが、第7号住の対ピットにより壊されている。柱穴は壁柱穴で、主軸上の奥壁部に1本と、左右に各6本が規則的に配置されており、連結部に周辺を除き、壁溝でつながっている。連結部の対ピットは、ピットを連ねたような「八」の字状で、柄部は浅く掘り込まれ、炉近くまで伸びている。第1号住にともなう埋甕は2基あり、対ピット間と、柄部先端に埋設されている。いずれも口縁部を欠いた深鉢である。

(2) 大宮市鎌倉公園遺跡第11号住居跡（第6図21）

称名寺（中）式期。主体部の壁・床面は明確に確認されていない。また、第10号住（第7図25）と重複しており、新旧関係は、本住居が古い。柱穴の配置から主体部は円形になるものと考えられ、南側に半円形の短い柄部が連結する。主体部規模は推定5.0m、柄部規模は 1.2×1.3 m、主軸長は6.2mである。炉は地床炉で、主体部中央に位置するが、主軸上からやや東へ偏っている。柱穴は壁柱穴が円形に整然とめぐっている。対ビットは、ビットを連ねた「八」の字状で、柄部は浅く掘り込まれている。対ビット間の埋甃は、口縁部を欠いた深鉢である。

(2) 富士見市閑沢遺跡第2地点1号住居跡（第6図22）

称名寺（中）式期。主体部はやや横長の円形で、南西側に長方形の柄部が連結する。主体部規模は 4.2×4.5 m、柄部規模は 2.0×1.6 m、主軸長は6.2mである。主体部中央からやや柄部寄りに地床炉がある。柱穴は壁柱穴で、主軸上の奥壁に接して1本と、左右対称に各4本が配置されている。連結部の対ビットは二対あり、外側のものはビットを連ねたような「八」の字状の形態で、主体部と柄部を区切るように溝で連結する。柄部は主体部に比べてやや浅く、先端が不整形の掘り込まれ、2本の柱穴がある。埋甃が対ビット間にあり、口縁部を欠いた深鉢が使われている。

(2) 川口市呴原遺跡5号住居跡（第6図23）

称名寺（中）式期。東壁の一部が確認されていないが、主体部はやや縦長の円形で、南西側に長方形の柄部が連結する。主体部規模は 4.8×4.6 m、柄部規模は 1.6×1.4 m、主軸長は6.4mである。炉は地床炉で、主体部中央に位置する。壁柱穴が、主軸上の奥壁部に1本と、左右に5～6本が壁直下にめぐる。対ビットは、ビットを連ねたような「八」の字状で、主体部と柄部をつなぐ。柄部は、主体部より深く掘り込まれ、中央に土塙と、先端には2本の柱穴がある。埋甃はない。

(2) 浦和市会ノ谷遺跡第12号住居跡（第6図24）

称名寺（中）式期。主体部は横長の楕円形で、北東側に横円形の柄部が連結する。主体部規模は 4.2×4.8 m、柄部規模は 1.6×1.8 m、主軸長は5.8mである。炉は地床炉で、主体部中央に位置する。柱穴は奥壁に1本と、左右に各2本を配置した5本柱穴で、壁直下にある。対ビットは、2本のビットをつなげたような逆「八」の字状である。柄部には浅い土壤がある。

(4) 大宮市鎌倉公園遺跡第10号住居跡（第7図25）

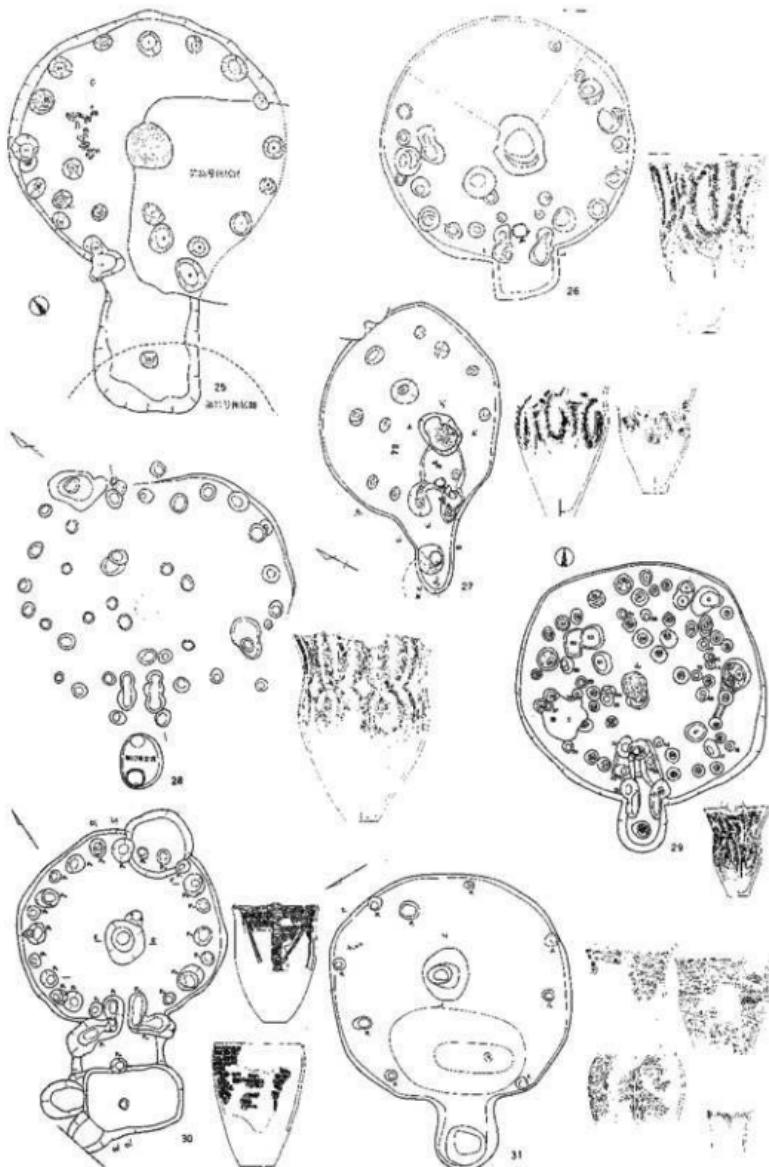
称名寺（中）式期。主体部規模は 6.0×5.8 m、柄部規模は 2.7×2.2 m、主軸長は8.5mである。主体部はやや縦長の円形で、南西側に方形で大型の柄部が連結する。炉は地床炉で、主体部中央に設けられ、炉体土器や埋甃は検出されていない。柱穴は、主軸上で奥壁から約25cm内側に1本、あとは主軸を挟んで12本が左右対称に壁直下にめぐっている。連結部には対ビットがあり、柄部は主体部に比べ掘り込みがやや浅く、柄部中央から先端寄りに柱穴が1本確認されている。大型の住居である。

(2) 上尾市東谷遺跡第1号住居跡（第7図26）

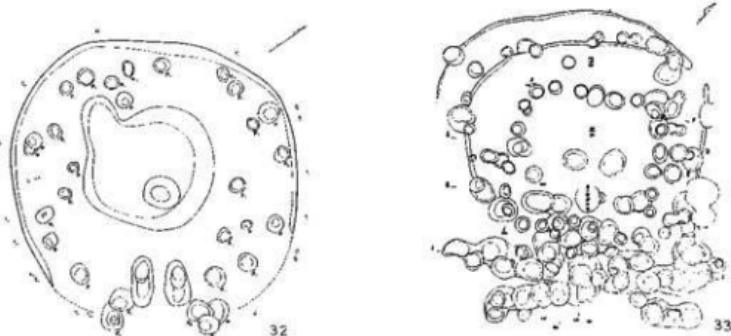
称名寺式（中）期。主体部規模は推定 5.2×5.5 m、柄部規模は 0.8×1.45 m、主軸長は約6.0mである。主体部はやや横長の円形で、東側に短い方形の柄部が連結する。炉は主体部中央に位置し、大型の地床炉である。連結部の対ビットは、ビットを連ねたような楕円形で、その間に埋甃がある。



第6圖 桃鏡形住居跡諸例（5）



第7図 納鏡形住居諸例 (6)



第8図 油銘形住居跡諸例（7）

埋甃は深鉢のほぼ完形個体である。柱穴は壁柱穴であり、壁直下にはば等間隔でめぐるが、連結部付近は対ピットと並ぶように直線的に配置されている。

（2）浦和市北宿遺跡第72号住居跡（第7図27）

称名寺式（中）期。主体部規模は $4.6 \times 3.7m$ 、柄部規模は推定 $1.8 \times 0.8m$ 、主軸長は $6.4m$ である。主体部は綫長の不整術円形で、南西側に梢円形の柄部が開いて連結する。炉は地床炉で、主体部の南西に偏って位置し、炉の西側が浅く掘り込まれ連結部の対ピットにつながっている。対ピット間と、柄部先端寄りに埋甃が検出されている。2基の埋甃は口縁部から胴上半部を欠損する。柱穴は壁柱穴で、壁から $30 \sim 50cm$ 内側に10本が配置されている。

（3）和光市義名山遺跡第4-A号住居址（第7図28）

称名寺式（中）段階。4-B号住と重複する。壁は部分的にみつかっただけで、地床炉、対ピット、円形に配置した柱穴、そして対ピットの先の主軸上に埋甃を伴う土壤が検出されている。主体部規模は推定 $4.5 \times 6.0m$ 、柄部規模は $0.8 \times 1.0m$ 、主軸長は $5.2m$ である。柱穴の配置から、主体部の平面形は横に広い梢円形であろう。壁柱穴は、規模・配置が不規則であるが、連結部では対ピットと並ぶように直線的な配置である。炉は地床炉で、対ピット寄りに位置し、埋甃は口縁部を欠いた深鉢である。

（4）大宮市指扇下戸遺跡第1号住居跡（第7図29）

称名寺式（新）段階。報文では、炉がつくり替えられていること、対ピットが位置をずらして二対あることから住居の建て替えを想定している。柱穴は、壁柱穴が主体部内を二重にめぐるよりもみえるが判然としない。新住居は、主体部規模 $5.2 \times 5.4m$ 、柄部規模 $1.1 \times 1.1m$ 、主軸長は $6.3m$ である。円形の主体部の南側に、梢円形の短い柄部が連結し、柄部はやや掘り窓めてある。主体部中央に地床炉が、連結部に溝状の対ピットがある。埋甃は炉と対ピットの中間と、柄部先端に埋設されており、新住居にともなうものとされている。主体部の埋甃は把手と口縁部の一部を欠くものの完形個体近く、柄部のものは破片で出土した。

(30) 与野市神明遺跡第3号住居跡（第7図30）

掘之内I式段階。主体部規模は $4.2 \times 4.5\text{m}$ 、柄部規模は $2.3 \times 2.0\text{m}$ 、主軸長は 6.5m である。主体部はやや横長の円形で、南西側に方形土壙状の柄部を連結する。炉は主体部中央からやや柄部寄りに位置し、地床炉である。連結部の対ビットは大きく屈曲した「八」の字状の形態をとる。壁柱穴はほぼ1本置きに規模の大きなものが、計11本配置され、奥壁の1本は主軸上にある。また柄部の2本の柱穴も主軸上に並ぶが、埋甕は出土していない。

(31) 和光市柿ノ木坂遺跡第13号住居跡（第7図31）

堀之内I式期。主体部規模は $4.9 \times 5.2\text{m}$ 、柄部規模は $1.5 \times 1.3\text{m}$ 、主軸長は 6.4m である。円形の主体部に、梢円形の柄部が連結する。地床炉が主体部ほぼ中央に位置するが、主軸上からやや南に偏っている。柱穴は壁柱穴が9本みつかっている。柄部先端は土壙状に掘り窪められているが、埋甕は出土していない。

(32) 和光市柿の木坂遺跡第6号住居跡（第8図32）

堀之内I式期。主体部はやや横長で、南東側にビットを連ねた「八」の字状の対ビットがある。主体部の規模は 6.0m である。炉は地床炉で、主体部中央に位置し、周囲は不整形に浅くほりこまれている。柱穴は壁柱穴で、等間隔に9本の柱穴がめぐる。

(33) 和光市丸山台遺跡6-A号竪穴式住居址（第8図33）

堀之内I式期。2軒の住居が重複し、A号住が新しい。主体部は横長の隅九方形で、南東側に発達した「八」の字状の対ビットがある。主体部の規模は一辺約 5m 、対ビットの長さ 1.8m 、対ビットの先端幅 3.4m である。炉は地床炉で、主体部中央より対ビット寄りに位置する。対ビットは小柱穴をいくつも連ね屈曲して開く。柱穴は壁柱穴で、直線的な配列である。

3 柄鏡形住居の変遷

これまでみてきた個別の事例について、柄鏡形住居がもつ、平面形、規模、炉、埋甕、柱穴などの属性を総合的に分析して、その変遷過程をあとづけてみたい。

〈中期終末段階〉

大宮台地で柄鏡形住居の初見となるのは、(1) 捷木山遺跡第1号住で、加曾利E III (新) 式期のものである。規模・形態ともに柄鏡形住居の初源的とされる特徴を備えている。壁溝や埋甕のあり方、あるいは5本柱の主柱穴構造をとることも古い様相と見てよいであろう。しかし、幅広で梢円形の柄部や、対ビットが連結部を離れてその内側、炉に寄った位置にあることなどに、地域性が認められる。

捷木山遺跡では、これまでの調査で、加曾利E III式期の住居跡が10軒見つかっており、(2) 第3号住も、対ビットと2基の埋甕の位置関係から、柄鏡形住居の可能性があると考えるが、他の8軒の住居は、柄部のない円形の住居である。このような併存関係は、柄鏡形住居がこの時期からつくり始められた状況を示すものとも捉えられる。

(3) 修理山遺跡第11号住も、加曾利E III (新) 式期であるが、柄部が付くものであるか、判然としない。しかし、対ビットと埋甕をもつことからすれば、柄部を有していた可能性は高い。この時期

で管見に触れたものは、以上の2遺跡の事例であり、本地域の柄鏡形住居の出現期を考えたい。

（後期初頭段階）

この段階の最も古い住居は、(4)明花東遺跡第1号住と、(5)上手遺跡J1号住である。残念ながら良好な事例いえないが、両事例の特徴に炉体土器をもつことが上げられる。これ以降、本地域では柄鏡形住居が広まるが、炉体土器をもつ事例は極めて少ないとから、比較的古い事例の属性として指摘できよう。

称名寺（古）式期の典型的な事例は、(7)東台遺跡第20号住である。東台遺跡は、武藏野台地の東縁に位置する遺跡で、第20号住は、部分的に敷石があり、本県の北西部に分布する敷石住居の東限となる事例である。

東台例が複雑な構造をもつて対して、大宮台地の(6)赤台遺跡J1号住、(8)黒谷田端前遺跡第5号住、(9)宿前川遺跡第2号住、(10)西大宮バイパスNo.5遺跡第2号住などは、簡素な形態といえる。またこれらの事例は、対ピット間の埋甕が、がとの中間に設けられたり、対ピットが小柱穴状であったりと、細部で異なることがわかる。

これらの事例とは別に、(11)会ノ谷遺跡第34号住や、(12)八幡耕地遺跡8号住は、東台例に近い事例であるが、主軸方向に縦長で、比較的小ぶりな主体部に、細身の柄部がつくことでは、全体的に共通する。

またこの時期には、(13)西大宮バイパスNo.5遺跡第1号住、(14)志久遺跡第8号住、(15)下加遺跡第45号住などのような比較的大型の住居もある。これは単に規模の大小に止まるものではなく、西大宮バイパスNo.5例と志久例は、対ピットがいわゆる「八」の字状に発達し、柄部も大型化する傾向が見て取れる。これは次期への形態変化を窺わせるものである。

他に(16)指扇下戸遺跡第2号住や、(17)下加遺跡第40号住は、中間的な規模のものといえようか。(18)下加遺跡第58号住や(19)同第58号住は、柄部の短い事例である。

称名寺（中）式期には、(20)下加遺跡第53号住、(21)大宮市A-69遺跡第1号住、(22)開沢遺跡第2地点1号住、(23)呉原遺跡5号住など、かなり規格性の強い事例がある。主体部はほぼ正円形で、方形の柄部をもつ、対ピットは完全な「八」の字状に発達する。柱穴は、これまでの壁柱穴のなかに4本あるいは5本の主柱構造をもつものから、同規模、等間隔の壁柱穴に変わる。加えて闇澤例や呉原例は柄部に、土壙や柱穴を備え、下加例は階段状の段差がある。また(24)鎌倉公園遺跡第10号住もこの事例にふくまれる。この形態は後の段階まで強く影響を及ぼし、堀ノ内I式期の(25)神明遺跡第3号住まで残る。

一方では、(26)鎌倉公園遺跡第11号住や、(27)会ノ谷遺跡第12号住、(28)東谷遺跡第1号住、(29)義名山遺跡代4-A号住のように柄部の短い住居も確実に継続しており、堀ノ内I式期の(30)柿ノ木坂遺跡第13号住にまで続いている。なお、柄部に土壙をもつのは全体的な共通要素である。

称名寺（新）式期には、良好な事例がない。(31)指扇下戸遺跡第1号住を上げておいたが、柄部の短いものであろう。他に大宮市今羽丸山遺跡第1号住、宮代町前原遺跡8号住などがある。前者が、柄部の短い形態、後者が「八」の字状対ピットをもつ形態のものであろうか、判然としない。

〈後期前半段階〉

塙ノ内1式期。先に述べたように、この時期まで柄鏡形の住居形態が残ることから、本段階をもって柄鏡形住居の終末段階としたい。この時期には、(32) 植ノ木坂遺跡第6号住や、(33) 丸山台遺跡第19-A、B号住があつて、これ以降の段階に引き継がれる。

4 まとめにかえて

本来、県内の柄鏡形住居の集成を目的として作業を進めてきたが、中間報告にも当たらないような内容のものとなってしまった。周知のように本県北西部の台地、丘陵、山地帯には敷石住居が分布し、大宮台地を中心とした県東部地域と対称をなす様相が認められる。東部地域の事例と異なり、北西部地域では、柄鏡形住居に敷石という属性が加わることで、多様な展開を見るため、当然のことながら、本県の事例を追っていただけでは、手詰まりとなってしまうのである。

しかし、大宮台地という限られた地域における柄鏡形住居のあり方について、その一端を示せたことで、次回につながるステップは残せたものと考えている。なお、参考・引用文献については文中に全て明記できなかつたご容赦願いたい。

参考・引用文献

- 会田 明他 1977 「富士見市文化財報告IB 関沢遺跡第2地点」 文化財調査報告第13集 富士見市教育委員会
青木義脩他 1991 「会ノ谷遺跡発掘調査報告書(第3次)」 浦和市遺跡調査会報告書第145集
浦和市遺跡調査会
青木義脩他 1994 「明花東遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第181集 浦和市遺跡調査会
青木義脩他 1996 「会ノ谷遺跡発掘調査報告書(第7次)」 浦和市遺跡調査会報告書第203集
浦和市遺跡調査会
青木秀雄 1983 「前原遺跡」 宮代町文化財調査報告書第1集 宮代町教育委員会
新屋雅明他 1994 「花ノ木・向原・初の木坂・永久保・丸山台」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第134集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
新屋雅明 1996 「今羽丹山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第173集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
磯野治司 1996 「提灯本山遺跡-第2次調査-」 北本市遺跡調査会報告書第2集 北本市教育委員会
今井正文 1986 「昭和60年度 桶川市遺跡群発掘調査報告書」 桶川市教育委員会
柿沼幹夫 1989 「上手遺跡発掘調査報告書」 北本市上手遺跡調査会
企籠文夫 1985 「吼原遺跡(先土器・縄文時代編)」 川口市文化財調査報告書第23集 川口市教育委員会
柳原功一 1995 「柄鏡形住居の柱穴配置」 帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集 帝京大学山梨文化財研究所
小宮山克己 1995 「宿前III遺跡」 上尾市遺跡調査会調査報告書代14集 上尾市遺跡調査会
城近憲市他 1976 「志久遺跡」 塙川市遺跡調査会報告書台31集 埼玉県遺跡調査会
菅谷通保 1995 「堅穴住居から見た縄文時代後・晩期-房総半島北部(北総地域)を中心とした変化について-」 帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集 帝京大学山梨文化財研究所
鈴木秀雄 1996 「坂東山・坂東山西・後B」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第166集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
立木新一郎他 1984 「鎌倉公園遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第9集 大宮市遺跡調査会
谷井 康・細田 勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利式」 日本考古学第2号 日本考古学協会

- 坪田幹男 1987 「埼玉県入間郡大井町東部遺跡群Ⅶ」 文化財調査報告第16集 大井町教育委員会
- 都築恵美子 1990 「駒穴住居址の系統について—縄文中期後半から後期初頭の住居変遷と時期的動態—」 東京考古古8 東京考古学談話会
- 野中和夫 1992 「丸山台遺跡群Ⅰ」 和光市埋蔵文化財調査報告書第5集 和光市遺跡調査会
- 浜野美代子 1990 「提灯木山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第92集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 細田 勝 1987 「神明・矢垂」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第65集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎朝雄 1976 「黒谷田端前遺跡」 岩槻市遺跡調査会
- 本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」 帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 山本輝久 1996 「敷石住居址研究の現状と課題」 「敷石住居のなぞに迫る」資料集 かながわ考古資料刊行会
- 山形洋一 1989 「西大宮バイパスNo.5遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第24集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一他 1991 「A-69号遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第31集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一 1992 「下加遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第35集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一他 1992 「指扇戸戸遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第39集 大宮市遺跡調査会
- 吉田 慎 1995 「修理山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第158集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要 第13号

1997

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社